

# 職業的価値感に関する研究(1)

— その実態ならびに進路指導との関連 —

武 衛 孝 雄

## 問題および研究目的

職業が個人の経済状態、社会的地位をはじめ、生活の習慣をも規定する現代社会において、個人がどんな職業に就くかということは、その生涯のほとんどを決定してしまうといっても過言ではない。まことに、職業遂行能力は、青年期における最も注目されるべき基本的課題であり、職業の選択および準備は、青年期における重大な発達段階のひとつである。

さて、個人の職業選択、職業的適応の要因として、従来、能力的適性、人格的適性、職業的興味をはじめとして、価値感、態度、要求、満足感、動機づけ、自己概念など個人の内在的、情意的概念；欲求不満、自我、適応機制など個人の内在的、精神分析的概念ならびに社会的地位、社会制度、慣習、労働市場など個人の外在的、社会経済的概念などが挙げられてきた。<sup>(1)</sup>

本研究では、個人の職業選択、職業的適応を解明するために、個人に内在する中心的概念として、職業的価値感をとり上げ、その実態を分析し、職業的価値感と上述の他の諸概念との関係を統合し組織化して検討し、職業的価値感と職業志望との関連、志望職業間にみられる価値感の差異などを探究し、さらに価値感研究と進路指導との関連を解明したいと思う。

いうまでもなく、人間は、あらゆる事象に対して、さまざまな視点からつねに良否の判断をしているのであるが、その判断の結果、対象に与えられた良否の品等が価値であり、その認識が価値感 values である。そして、対象認知と同時的に形成されるこの価値感とは、そのみで個人内に分離、独立して存在しているのではなく、他の上述のような内在的諸要因と密接に結

合しているのである。

職業的価値感 occupational values は、職業およびそれに付帯している種々の事象に対して個人がもつ価値意識を総称したものである。M. Rosenberg は、価値感の定義に、R. M. Williams, Jr. の説を引用して、職業的価値感とは、人たちが職業に対して欲し、望んだり、理想的であると考えたり、あるいは義務であると感じたり、尊敬し、楽しんだりする意識であると述べている。<sup>(2)</sup>

かくて、職業的価値感とは、職業の選択ないし決定がなされるころの必要な基準である。すなわち、個人は、この価値感の基礎の上に、一職業を志望し、あるいは決定するのである。個人の適切な職業決定は、職業選択、職業的適応と職業的価値感との一致においてなされるべきである。そして、職業的価値感に関する的確な把握は、個人の職業選択、職業的適応の解明にとって、きわめて重要な意義をもつのである。

職業選択過程を発達的にとらえた Ginzberg らは、11～18才頃の職業選択の主要因として、11～12才に興味、13～14才に能力、15～16才に価値感がそれぞれ現われてくると述べているが、増田氏の研究によれば、価値感とは性能よりも先行して、12～15才（中学生段階）で、かなり強い要因となって出現している。<sup>(3)</sup>

価値感には、一般に、その源泉として、まず要求が存在しなければならない。すなわち、要求のないところに価値は存在しえないのである。しかも、個人に意識されている要求ばかりではなく、意識されていない基本的な有機的要求にいたるまで、すべてが価値の源泉なのである。<sup>(4)</sup> 個人の価値感とは、もとよりきわめて主観的なものであって、これを客観的、実態的に把握する

ために、価値感自体を追究するということは、頗る困難であるから、本研究では、個人の価値感が上述の要求とその満足という形で表明された現象形態を通して、価値感の実態に接近したいと思う。

## 研究 方 法

人は、はたして職業または職業生活に対して、どのような要求をもち、またその満足を求めているであろうか。とくに、現実に職業に従事していない学生や生徒が、近い将来、就かなければならない職業または職業生活に関して、何を期待し、どういう要求の満足を重視して、何に高い価値を体感しているであろうか<sup>(5)</sup> 本

研究では、まず、これを解明するために、1963年7月上旬、松江市内の公立中学校3年生約700名を対象として、質問紙法による調査を施行し、有効回収数410(男220,女190)を得た。

調査票は、進路志望調査と職業的価値感調査とからなり、とくに後者は、M. Rosenberg の原案<sup>(6)</sup>を、わが国の実情および筆者の過去3度にわたる予備調査の結果を参考し、項目を改訂・増補して作成した。なお、調査は、教室で実施し、監督教官が質問紙の各項目を簡単に解説しながら、順次、生徒に回答させ、また自由記述欄を大いに利用させるなどして、個人の現実的な志望職業に対する要求や期待が質問紙に十分に反映するように、特別な配慮がなされた。

### 進路希望・職業価値感調査

(調査前文) 省 略

- 質問 1. (進学希望調査 5項目) 省略  
 質問 2. [職業希望調査(産業別) 3項目] 省略  
 質問 3. [職業希望調査(職務別) 2項目] 省略

質問 4. 理想的な職業または仕事に対する人びとの要求を次に挙げました。このリストを読んで、あなたの志望する職業(第1志望)が、どの程度、これらの要求を満足させるかを考えて下さい。回答は、次の記入法によること。

- (記入法) イ……あまり重要でない。または無関係だと考えている。  
 ロ……(普通程度に)重要だと考えている。  
 ハ……非常に重要だと考えている。

各項目のイロハを上規準に従って、そのいずれかに○をつけること。

例 イ ロ ○ ( )

あなたが希望している職業は、	重要でない 又は無関係	普通	非常に 重要
1. 自分の特別な能力や適性を生かす機会が得られる。……………	イ	ロ	ハ ( )
2. 十分な収入を得て、豊かな生活をする事が期待できる。……………	イ	ロ	ハ ( )
3. 社会的地位や名声が得られる。……………	イ	ロ	ハ ( )
4. 社会に役立っているという誇りをもつことができる。……………	イ	ロ	ハ ( )
5. 自分の創造性や独創性を生かすことができる。……………	イ	ロ	ハ ( )
6. 安定した、保証された将来への見通しが得られる。……………	イ	ロ	ハ ( )
7. さまざまな人たちと一っしょに仕事をする機会が得られる。……………	イ	ロ	ハ ( )
8. 人間としての義務をはたしているという喜びが与えられる。……………	イ	ロ	ハ ( )
9. 他人からの監督を受けることが少なく、比較的自由である。……………	イ	ロ	ハ ( )
10. 昇進・昇給の機会が多い。……………	イ	ロ	ハ ( )
11. 指導者としての能力がみかかれる機会が得られる。……………	イ	ロ	ハ ( )
12. 今まで世話になった人たちに報いる機会が得られる。……………	イ	ロ	ハ ( )
13. 他人を助力(助成)する機会が得られる。……………	イ	ロ	ハ ( )
14. 冒険的なことやめずらしいことや、他人のあまり やらないことをする機会が得られる。……………	イ	ロ	ハ ( )

15. その職業につくことによっていろいろなことを勉強する機会が得られる。… イ      ロ      ハ ( )  
 16. 仕事の余暇や娯楽の時間が十分にとれ、楽しむことができる。…………… イ      ロ      ハ ( )  
 17. その他 [くわしく書いて下さい： ] … イ      ロ      ハ ( )  
 あなたが、いまハを○で囲んだものがありましたら、それらのうちとくに重要なもの2つを選んで、ハの次にある ( ) の中に、重要な順に1, 2の順位をつけて下さい。(ただしハを○で囲んだ項目がなかったり1つしかない場合は、そのままにしておくこと)

例    イ      ロ      ⊙(1)

質問 5. (職業興味、適性の自覚および職業情報収集の方法ならびにそれらの程度に関する調査 3項目) 省略

調査票の質問4における回答は、各項目に対して、イ：重要でないまたは無関係、ロ：(普通程度に)重要、ハ：非常に重要の3段階にまず評価させ、つぎにハを2項目以上にわたってチェックした回答者には、ハと評価された各項目を比較させ、その中で最も重要だと考える項目から順位をつけて2項目を選択させた。すなわち、ハ(第1位)：1項目、ハ(第2位)

：1項目、ハ、ロ、イ：各1項目以上が選択されたわけである。

### 結果および考察

#### I 職業的価値感の実態

調査結果は、Table 1 に示すとおりである。すなわち、16項目の中で 1.適性が最も高く、

Table 1 職業的価値感性別表

項目番号	項目(要約)	反 応	男		女		男女差の有意性	計		Rosenbergの結果 %
			反応数	%	反応数	%		反応数	%	
1	適 性	(ハ1 最も重要)	(48)	(21.8)	(24)	(12.6)		(72)	(17.6)	(27)
		ハ非常に重要	108	49.1	74	38.9		182	44.5	78
		ロ重要	86	39.1	97	51.1		183	44.6	20
		イ重要でないまたは無関係	26	11.8	19	10.0		45	11.0	2
2	収 入	(ハ1 最も重要)	(18)	(8.2)	(12)	(6.3)		(30)	(7.3)	(10)
		ハ非常に重要	66	30.1	42	22.1		108	26.3	39
		ロ重要	126	57.3	119	62.6		245	59.8	48
		イ重要でないまたは無関係	28	12.7	29	15.3		57	13.9	13
3	地 位	(ハ1 最も重要)	(3)	(1.4)	(0)	(0)		(3)	(0.7)	(2)
		ハ非常に重要	10	4.6	8	4.2		18	4.4	26
		ロ重要	85	38.6	58	30.5		143	34.9	53
		イ重要でないまたは無関係	125	56.8	124	65.3		249	60.7	21
4	社会的 貢 献	(ハ1 最も重要)	(9)	(4.1)	(9)	(4.7)		(18)	(4.4)	
		ハ非常に重要	55	25.0	49	25.8		104	25.4	
		ロ重要	117	53.2	89	46.8		206	50.2	
		イ重要でないまたは無関係	48	21.8	52	27.4		100	24.4	
5	独創性	(ハ1 最も重要)	(9)	(4.1)	(6)	(3.2)		(15)	(3.7)	(10)
		ハ非常に重要	87	39.5	66	34.8		153	37.4	48
		ロ重要	91	41.4	69	36.3		160	39.0	39
		イ重要でないまたは無関係	42	19.1	55	28.9		97	23.7	13
6	安定性	(ハ1 最も重要)	(22)	(10.0)	(18)	(9.5)		(40)	(9.8)	(24)
		ハ非常に重要	80	36.4	55	29.0	***	135	33.0	61
		ロ重要	103	46.8	98	51.6		201	49.0	31
		イ重要でないまたは無関係	37	16.8	37	19.5		74	18.0	8
7	社会性	(ハ1 最も重要)	(10)	(4.5)	(17)	(8.9)		(27)	(6.6)	(7)
		ハ非常に重要	56	25.4	74	38.9	***	130	31.7	44
		ロ重要	119	54.1	90	47.4		209	51.0	36
		イ重要でないまたは無関係	45	20.5	26	13.7		71	17.3	20

職業的価値感に関する研究 (1)

8	義務	(ハ1 最 も 重 要)	(9)	(4.1)	(18)	(9.5)		(27)	(6.6)	
		ハ非 常 に 重 要	60	27.3	55	29.0	*	115	28.0	
		ロ重 要	132	60.0	93	48.9		225	54.9	
		イ重要でないまたは無関係	28	12.7	42	22.1		70	17.1	
9	自由	(ハ1 最 も 重 要)	(9)	(4.1)	(1)	(0.5)		(10)	(2.4)	(3)
		ハ非 常 に 重 要	49	22.3	29	15.2		78	19.0	38
		ロ重 要	102	46.4	92	48.4		194	47.3	48
		イ重要でないまたは無関係	69	31.4	69	36.3		138	33.7	14
10	昇進	(ハ1 最 も 重 要)	(4)	(1.8)	(0)	(0)		(4)	(1.0)	
		ハ非 常 に 重 要	33	15.0	6	3.1	**	39	9.5	
		ロ重 要	122	55.5	109	57.4		231	56.3	
		イ重要でないまたは無関係	65	29.5	75	39.5		140	34.1	
11	指導者	(ハ1 最 も 重 要)	(6)	(2.7)	(1)	(0.5)		(7)	(1.7)	(4)
		ハ非 常 に 重 要	42	19.0	24	12.7	**	66	16.1	32
		ロ重 要	106	48.2	85	44.7		191	46.6	53
		イ重要でないまたは無関係	72	32.7	81	42.6		153	37.3	15
12	報恩	(ハ1 最 も 重 要)	(2)	(0.9)	(2)	(1.1)		(4)	(1.0)	
		ハ非 常 に 重 要	25	11.4	29	15.4		54	13.2	
		ロ重 要	107	48.6	80	42.1		187	45.6	
		イ重要でないまたは無関係	88	40.0	81	42.6		169	41.2	
13	助力	(ハ1 最 も 重 要)	(10)	(4.5)	(12)	(6.3)		(22)	(5.4)	(10)
		ハ非 常 に 重 要	53	24.0	55	28.9		108	26.4	43
		ロ重 要	100	45.5	82	43.2		182	44.4	44
		イ重要でないまたは無関係	67	30.5	53	27.9		120	29.3	13
14	冒険	(ハ1 最 も 重 要)	(9)	(4.1)	(4)	(2.1)		(13)	(3.2)	(1)
		ハ非 常 に 重 要	34	15.4	29	15.2		63	15.4	16
		ロ重 要	65	29.5	47	24.7		112	27.3	40
		イ重要でないまたは無関係	121	55.0	114	60.0		235	57.3	44
15	勉学	(ハ1 最 も 重 要)	(9)	(4.1)	(18)	(9.5)		(27)	(6.6)	
		ハ非 常 に 重 要	80	36.4	77	40.5	**	157	38.3	
		ロ重 要	103	46.8	95	50.0		198	48.3	
		イ重要でないまたは無関係	37	16.8	18	9.5		55	13.4	
16	余暇	(ハ1 最 も 重 要)	(7)	(3.2)	(8)	(4.2)		(15)	(3.7)	
		ハ非 常 に 重 要	41	18.6	33	17.4		74	18.1	
		ロ重 要	110	50.0	85	44.7		194	47.6	
		イ重要でないまたは無関係	69	31.4	72	37.9		141	34.4	
調 査 対 象 数			220		190		410		4,585	

注 1. ハ(1)は、ハの内数である。

2. 有意水準: \*\*\* 0.01 $\geq$ P \* 0.05 $\geq$ P>0.01 (X<sup>2</sup>テストによる。)

3. 項目17(その他)で自由記述された内容を検討したところ、それらのほとんどすべては、16項目のいずれかに属するものとして分類することができた。本表に示す各項目への反応数は、この自由記述分をも含んでいる。(7)

実に44.5%の生徒によって非常に重視され、また、これを最高位に評価した者は、17.6%に達している。しかも、これを無視した生徒は、11%にすぎない。同様に観察すれば、ついで 5. 独創性、15. 勉学、6. 安定性、7. 社会性が重視されているが、3. 地位、9. 自由、10. 昇進、11. 指導者、12. 報恩、14. 冒険、16. 余暇は、さほど重視されず、むしろ30%以上の生徒によって無

視される傾向が認められ、職業または職業生活に対する真摯な態度が窺われる。(8) Rosenbergは、同様の調査(項目1, 2, 3, 5, 6, 7, 9, 11, 13, 14からなっている)を大学生を対象として実施しているが、その結果(Table 1 右端列)(9)と参考までに比較すれば、とくに顕著な差異は、3. 地位、9. 自由、11. 指導者、13. 助力の各項目に対するそれぞれの反応の間に

みることができ、いずれもアメリカの学生のほうが、これらを高く評価している点にある。このことは、筆者らの本邦大学生を対象とした調査結果においても認められたところである。<sup>60)</sup>

つぎに、男女差について考察すると、6.安定性、8.義務、10.昇進、11.指導者の4項目においては、男子のほうが女子よりも高く評価し、逆に、7.社会性、15.勉学の2項目においては、女子のほうが男子よりも高く評価している(項目8は5%水準、その他は1%水準で、男女差に有意性が認められる)。<sup>61)</sup>

上述のことから、多くの中学生が自己の将来の職業に対して高い価値を体感している点は、その職業が自己の能力・適性を生かす機会となることであり、ないしは、独創性を生かす機会となることである。また同時に、職業生活から得られる貴重な人生経験に最大の価値を見出しているのである。すなわち、かれらは、自己の生来の、または後天的に獲得した、潜在力や能力の活用に最大の強調点をおいているのである。

上述の適性、独創性の2つの価値は、同一の個人において、年令(学年の上昇)とともに、ますます重視される傾向があるということ Rosenbergs は報告している。また、社会性や安定性も重視されてはいるが、これらは、進級とともに次第に軽視されていく傾向を筆者も見出している。すなわち、職業によって獲得することができるものから、仕事そのものへの才能や適性の活用へと移行するのである。さらに換言すれば、道具的価値としての職業は、徐々に内在的価値としての職業へと発展するのである。<sup>62)</sup>

## II 各価値感間の関係

価値感とは、もとより、そのひとつひとつが、完全に分離・独立して個人に内在するのではない。ゆえに、ひとつの職業的価値感とは、当然、特定の他の職業的価値感に連関していることが考えられる。よって、つぎに個人の職業的価値感相互の関係ならびに各価値感の位置づけに関して考察したいと思う。

Table 2 において、それぞれの職業的価値感相互の相関関係により、その結合および排斥

の程度を検討した。各価値感間の相関は、それぞれ2つの価値感間の心理的な隔たりと考えることができる。

7.社会性と13.助力との相関は、かなり高く+.434を示すが、これらは一括して「社会に位置づけられた価値群」people-oriented value complex あるいは社会性重視群と考えられ、これらの価値を重視した者は、職業を人間関係から導き出される満足を得る機会としてみている。

2.収入と3.地位との間は、+.531、また、2.収入と6.安定性との間は、+.470、さらに、2.収入と10.昇進との間は、+.463と、いずれもかなり高い相関が認められるが、これらは一括して「外在的(付带的)な報酬に位置づけられた価値群」extrinsic reward-oriented value complex あるいは経済性重視群と考えられ、ここでは職業が道具的価値としてみられているのである。また、これらの価値とその他の価値との相関が低いことから、これらを重視した者は、仕事自体から生み出される満足感よりも、仕事をすることによって得られる報酬や地位に高い価値を体感していることが知られる。

4.社会的貢献と8.義務との間には、+.371、12.報恩との間には、+.443の相関がみられるが、これらは一括して、「職業的義務感に位置づけられた価値群」あるいは義務感重視群と考えられ、日本特有の職業神聖視ともつながるもので、外国にはその例をみない考え方である。Table 1 で知られるように、さほど顕著には現われていないが、無視する者が多いともいえず、職業に対するこのような考え方が、まだ根深く残存していることは否めない事実である。

5.独創性と1.適性との間には、+.536というかなり高い相関が認められるが、これらは一括して「自己実現に位置づけられた価値群」self expression-oriented value complex あるいは自己実現性重視群と考えられ、これらの価値を重視した者は、職業それ自体に内在する価値を高く評価し、仕事そのものを目的として、職業を自己の才能や潜在力を表現するための機会と考えているのである。<sup>63)</sup>

Table 2 各価値感間の相関

価値感	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
1 適性・能力		(-.141)	(-.107)		(+.470)	(-.199)	(-.126)		(+.064)		(+.047)		(+.105)	(+.007)		
2 収入	-.273		(+.594)		(-.177)	(+.342)	(-.126)		(+.148)		(+.136)		(-.336)	(+.147)		
3 社会的地位	-.208	+.531			(+.007)	(+.331)	(+.245)		(+.166)		(+.369)		(-.002)	(+.281)		
4 社会的貢献	+.255	-.278	-.032													
5 独創性	+.536	-.196	-.145	+.283			(-.078)		(+.222)		(+.142)		(+.140)	(+.430)		
6 安定性	-.105	+.470	+.393	+.295	-.279		(+.123)		(-.054)		(-.063)		(+.073)	(-.136)		
7 社会性	-.218	+.097	+.176	+.202	-.172	+.091			(+.005)		(+.320)		(+.580)	(+.020)		
8 人間の義務	+.094	-.156	-.027	+.371	+.105	+.125	+.216									
9 自由	-.013	-.105	+.135	-.18	+.305	+.056	-.109	-.129			(+.330)		(+.045)	(+.369)		
10 昇進・昇給	-.082	+.463	+.378	+.052	-.218	+.385	+.073	-.066	+.187							
11 指導者への成長	+.175	+.208	+.354	+.284	+.250	+.181	+.154	+.273	+.221	-.075			(+.220)	(+.413)		
12 人々への報恩	+.091	-.102	-.015	+.443	+.099	+.213	+.151	+.394	-.086	-.010	+.103					
13 助力	+.213	-.199	+.028	+.370	+.237	+.104	+.434	+.247	+.122	-.084	+.322	+.097		(+.339)		
14 冒険	+.247	+.150	+.174	-.116	+.251	-.313	+.075	-.038	+.417	+.193	-.164	-.233	+.176			
15 勉学	+.309	+.029	+.233	+.087	+.293	+.081	+.227	+.005	+.276	+.185	+.213	-.017	+.060	+.239		
16 余暇	-.080	+.032	+.164	-.034	+.103	+.039	+.118	-.020	+.144	+.083	-.002	-.070	-.081	+.046	+.183	

注 括弧内は、Rosenbergによる結果を示す。

職業的成功のための重要な条件のひとつとして、個人が適切な動機づけをもち、生産意欲をかきたてることのできるような職業を選択しなければならないが、この生産意欲を発揮できる要因として、かつて B. Russell は、個人がその職場において自己の意志を働かせる可能性を把持していることを指摘し、また H. J. Ruttenberg は、職場における人々の基本的要求、生産力および満足感に関し研究して、生産意欲を高揚させて個人を職業的成功に導く重要な要因のひとつが、上述の「自己実現」にほかならないことを主張している。<sup>64)</sup>

Table 2 に示すように、1.適性および5.独創性と2.収入および3.地位との間、14.冒険と6.安定性との間などは、いずれも、若干の排斥関係を示し、これらの価値は、それぞれある程度対立していると考えられる。かくして、職業的価値感における最も大きい心理的隔たりは、職業に高い内在的価値を見出している者と、高い道具的価値を見出している者との間にあるということができる。

### III 志望職業間にみられる

#### 職業的価値感の差異

前述のように、今回の調査では、進路のみならず、個人の職業適性の自覚・興味の程度、職業情報収集の方法等をも併せて、具体的に把握できるように配慮した。調査票に対するこれらの回答を検討した結果、かれらは、すでに職業に関する知識・洞察も深く、各自の志望職業への意識もかなり明確であるが、中には、志望職

業と上級学校コース選択との関連において妥当性を欠いていたり、志望職業と価値感との間に常識的な矛盾が認められるような反応も僅少なから数えられ、ここにすでにこれらの生徒に対する今後の進路相談の必要性を暗示していた。

職業選択と価値感との間の上述の「矛盾」に関する精密な科学的検討は、個人の職業的価値感の発達・変化と、就職後の職業的適応、職業的満足感および職業的成功との関連など、今後のかなり長期にわたる個人に関する追跡研究の成果を俟たねばならないのであるが、中学3年生の発達段階にあっても、ほとんどの生徒において、すでに職業的価値感が成立していて、また志望各職業に対する価値のおきどころは、それぞれ、きわめて至当のように思われた。

つぎに、志望職業間にみられる価値感の差異を検討するために、下記の職業群に属する職業を第1志望とする生徒の調査票(有効票)を改めて抽出し、これを本節における研究対象として、かれら個々の職業的価値感を後述のようにして分析した。

- (1)農・林・漁業 (2)製造 (3)建築
- (4)販売 (5)医療 (6)運輸・通信
- (7)ジャーナリズム (8)金融 (9)芸術
- (10)教職 (11)人文・社会科学 (12)自然科学
- (13)司法 (14)飲食・ホテル・観光 (15)公務
- (16)貿易・商社 (17)サービス一般(前記以外)

上記の各志望職業群において、抽出した職種および男女別の抽出数は、Table 3 のとおりである。

Table 3 第3節の研究対象となった志望職業一覧表 (\* 経済審議会分類による)

対象とした職業群	対象とした職種*	抽出数			調査票に現われた志望職名の例
		男	女	計	
農・林・漁	専門的, 熟練的	10	5	15	技師, 農林漁労務
製 造	専門的, 熟練的, 管理的	20	10	30	技師, 工具, 工場経営
建 築	専門的, 熟練的	20	0	20	技師, 大工, 左官
販 売	販売的	5	20	25	商店員, セールスマン
医 療	専門的	15	5	20	医師, 歯科医師
運 輸・通 信	熟練的	15	10	25	運転士, 交換手

職業的価値感に関する研究 (1)

ジャーナリズム	専門的	15	5	20	記者, 編集者
金融	事務的, 管理的	15	10	25	銀行, 証券会社, 保険会社員
芸術	専門的	5	20	25	音楽家, 画家
教職	専門的	10	15	25	学校教員
人文・社会科学	専門的	10	5	15	大学教員, 研究所員
自然科学	専門的	10	10	20	大学教員, 研究所員
司法	専門的	15	5	20	判・検事, 弁護士
飲食・ホテル・観光	管理的, 事務的	10	15	25	飲食店・ホテル経営, 同事務員
公務	事務的	10	20	30	官公庁職員
貿易・商社	事務的, 管理的, 熟練的	10	10	20	貿易・商社員
サービス一般	熟練的	5	15	20	理髪師, 美容師, ガイド
合	計	200	180	380	

かれらの職業的価値感を、第2節で述べた4群に分け、(1)自己実現に位置づけられた価値群(1.適性と5.独創性の2つの価値の重みづけの平均評点をもって示す)(2)社会に位置づけられた価値群(7.社会性と13.助力との平均評点)(3)外在的な報酬に位置づけられた価値群(2.収入と3.地位と10.昇進との平均評点)(4)職業的義務感に位置づけられた価値群(4.貢献と8.義務と12.報恩との平均評点)として、それぞれの価値群に与えられた重要性をもって、選択された職業を、各群別にランクした。その結果を表示すれば、Table 4~7 のようになる。

Table 4 「自己実現に位置づけられた価値群」の平均評点によって序列された職業

順位	職業	平均評点
1	芸術	2.65
2	自然科学	2.58
3	ジャーナリズム	2.57
4	製造	2.53
5	建築	2.45
6	農・林・漁	2.44
7	人文・社会科学	2.43
8	医療	2.41
9	教職	2.33

10	サービス一般	2.31
11	司法	2.26
12	運輸・通信	2.20
13	飲食・ホテル・観光	2.08
14	貿易・商社	2.04
15	金融	2.01
16	公務	1.95
17	販売	1.93
平均		2.29

Table 5 「社会に位置づけられた価値群」の平均評点によって序列された職業

順位	職業	平均評点
1	サービス一般	2.47
2	教職	2.44
3	公務	2.29
4	医療	2.28
5	金融	2.23
6	人文・社会科学	2.11
7	ジャーナリズム	2.06
8	司法	2.05
9	貿易・商社	2.02



10	販 売	1.97
11	飲食・ホテル・観光	1.96
12	運 輸 ・ 通 信	1.94
13	建 築	1.87
14	製 造	1.80
15	自 然 科 学	1.80
16	芸 術	1.73
17	農 ・ 林 ・ 漁	1.71
平 均		2.04

3	サ ー ビ ス 一 般	0.72
4	司 法	0.68
5	教 職	0.65
6	自 然 科 学	0.62
7	公 務	0.62
8	建 築	0.59
9	ジャーナリズム	0.56
10	人文・社会科学	0.55
11	貿 易 ・ 商 社	0.50
12	製 造	0.50
13	運 輸 ・ 通 信	0.47
14	芸 術	0.45
15	飲食・ホテル・観光	0.42
16	販 売	0.38
17	金 融	0.31
平 均		0.55

Table 6 「外在的報酬に位置づけられた価値群」の平均評点によって序列された職業

順位	職 業	平均評点	「安定性」の平均評点
1	飲食・ホテル・観光	2.02	1.15
2	金 融	1.98	1.63
3	販 売	1.95	1.21
4	貿 易 ・ 商 社	1.93	1.32
5	運 輸 ・ 通 信	1.82	1.64
6	医 療	1.77	1.86
7	司 法	1.69	1.50
8	サ ー ビ ス 一 般	1.60	1.90
9	建 築	1.52	1.69
10	製 造	1.47	1.73
11	ジャーナリズム	1.33	1.44
12	公 務	1.32	2.01
13	自 然 科 学	1.27	1.90
14	教 職	1.18	1.95
15	農 ・ 林 ・ 漁	1.09	1.08
16	人文・社会科学	0.99	1.82
17	芸 術	0.91	1.01
平 均		1.53	1.58

Table 7 「職業的義務感に位置づけられた価値群」の平均評点によって序列された職業

順 位	職 業	平均評点
1	医 療	0.83
2	農 ・ 林 ・ 漁	0.74

この4つの表から明らかなように、選択された職業と価値群の間には、一定の関連がみられる。

すなわち、芸術、自然科学、ジャーナリズム、製造などの各分野を志望するものは、それぞれ自己の将来の仕事に対する適性・能力や独創性の発揮を重視しており、ついで建築、農林漁業、人文・社会科学などを志望するものが、これらを重視している。逆に、公務や販売、金融などの実業に進出しようとするものは、これらの自己実現的価値を最も低く評価している。

社会に位置づけられた価値群は、サービス一般、教職、公務、医療などに進むものが、つよく強調している。これは、明らかに、以上の職業が直接人間を対象とし、他人とともに協力して遂行されるべき性格をもっていることと関連しているためである。逆に、この価値群が、農林漁業、芸術、自然科学、製造などの領域をみざすものにとって、無視されがちであることもまた当然である。

飲食・ホテル・観光、金融、販売、貿易・商社などを志望するものは、外在的報酬（収入・

地位)を強調しており、逆に芸術、人文・社会科学、農林漁業などの方面に進むものは、これらを軽視している。また、公務、教職、自然科学などを志すものは、収入や地位を低く評価しているが、将来の安定を非常に重視している。

職業的義務感の若干高いものは、医療、農林漁業、サービス一般、司法などに従事しようとするものにみられるが、金融、販売、飲食・ホテル・観光などを望むものは、これを無視している。宗教を志望するものが、ほとんどなかったため、本研究では抽出職業群に宗教を挙げることができなかったが、宗教の分野を志望するものは、他の職業志望者とは明確な有意差をもって、おそらくここで最高位にランクされるであろう。

つぎに、具体的にひとつの職業的価値が、上述のどの志望職業群において、高く評価され、大きく考慮されているかを検討してみると、おおそ次記のようにいうことができる〔以下の記述中における高低両価値間には、5%水準で有意差が認められた( $\chi^2$ テストによる)〕。

- (1) 「適性」については、いずれの職業でもかなり高く評価されていて、志望職業間に有意差は認められない。
- (2) 「収入」については、金融、飲食・ホテル・観光、販売の各志望者で高く評価され、芸術、教職、人文・社会科学の各志望者では、低く評価されていて、あまり考慮されていない。
- (3) 「地位」については、中学3年生のこの段階では、あまり考慮されておらず、志望職業間に有意差が認められない。
- (4) 「社会的貢献」では、医療と教職の志望者において、わずかに優位が認められるが、他の志望職業との間に有意差はみられない。
- (5) 「独創性」については、芸術、自然科学、製造、ジャーナリズム、建築の各志望者に高く認められるが、逆に、公務、金融、販売の各志望者は、その職業によって自己の独創性や創造性が生かされるとは考えていないようである。
- (6) 「安定性」では、Table 6の右端列に示すように、公務志望者がこれを最も高く評価し、芸術志望者は、ほとんど考慮していない。
- (7) 「社会性」については、公務志望者が最高位にあり、以下の順位は、おおそTable 5に準じているが、志望職業間に有意差は認められない。
- (8) 「義務」を重視するものは、教職志望者に若干見受けられるが、金融、販売の各志望者においては、ほとんどみられない。
- (9) 「自由」については、芸術、教職の各志望者にみられるが、公務、金融の各志望者では認められない。
- (10) 「昇進」については、(2)とほぼ同様の傾向であるが、金融志望者が最高位に、ついで貿易・商社、飲食・ホテル・観光の順にランクされ、農林漁業、芸術の各志望者が最下位である。
- (11) 「指導者」では、教職、公務の各志望者に顕著にみられ、農林漁業、芸術の各志望者からは無視されている。
- (12) 「報恩」では、サービス一般、医療、司法の各志望者に若干の高得点を記録したが、他の志望職業との間に有意差は認められない。
- (13) 「助力」という価値は、サービス一般、教職、人文・社会科学、医療の各志望者によって高く評価され、農林漁業、芸術、製造の各志望者は、ほとんどこれを無視している。
- (14) 「冒険」については、ジャーナリズム、飲食・ホテル・観光の各志望者が高く評価し、公務、教職、人文・社会科学の各志望者が最も低く評価している。
- (15) 「勉学」では、いずれも高く評価されていて、各志望職業間に有意差は認められない。
- (16) 「余暇」を重視するものは、公務、教職、医療の各志望者にみられ、またジャーナリズム、貿易・商社、製造の各志望者

は、これらの職場がつねに多忙だという印象をもっているらしく、ほとんど無視している。

以上は、職業的価値に関して各志望職業間の差異をみたのであるが、つぎに各志望職業は、

いかなる職業的価値に誘意性をもっているか、志望職業を中心とした価値体系について、各志望職業ごとに概観すると、Table 8 のようになる。

Table 8 各職業志望者の価値感における顕著な傾向

志望職業	価値	高く評価されている価値	無視または低く評価されている価値
農 林 漁 業		社会的貢献	指導者, 昇進, 助力
製 造		独 創 性	余暇, 社会性, 助力
建 築		独 創 性	
販 売		収 入	独創性, 義務, 報恩
医 療		収入, 地位, 社会的貢献, 助力, 余暇	
運 輸 ・ 通 信		報 酬	
ジャーナリズム		冒険, 適性, 独創性	地位, 余暇
金 融		収入, 昇進	冒険, 自由, 義務, 報恩
芸 術		適性, 独創性, 自由	{指導者, 助力, 収入, 安定性, 社会性, 昇進
教 職		安定性, 指導者, 助力, 余暇, 義務, 自由	収入, 冒険
人文・社会科学		適 性	冒険, 収入
自 然 科 学		適性, 独創性	収 入
司 法		義 務	
飲食・ホテル・観光		収入, 冒険	報 恩
公 務		指導者, 余暇, 安定性, 社会性	冒険, 自由, 独創性
貿 易 ・ 商 社		昇進, 収入	余 暇
サービス一般		社会的貢献, 助力, 報恩, 社会性	

上表から、とくに顕著な傾向を略述したい。

- (1) 公務員志望者においては、職業の「安定性」が追求され、「冒険」や新奇な経験は無視されている。
- (2) ジャーナリスト志望者では、とくに「適性」と「独創性」と「冒険」が高く評価され、「地位」は低く評価されている。これはジャーナリズム出身の政党政治家とも一脈相通ずる傾向であって、官僚出身の代議士とは、この点で異なっている。
- (3) 芸術関係志望者では、「独創性」や「適性」への価値が大きく考えられ、「指導者」への成長などは、考慮されていない。

- (4) 人文・社会科学や自然科学の研究を志望するものでは、「適性」を生かすことが第一に重視され、「収入」や「冒険」については、考慮されていない。
- (5) 教職志望者においては、他人を「助力」という価値が、とくに高く評価されている。
- (6) 医師志望者は「助力」および「余暇」の活用とを高く評価し、同時に「地位」や「社会的貢献」も併せ考えられている。
- (7) 工業技術関係志望者では、「独創性」が重視され、「助力」が軽視されている。
- (8) 金融関係志望者においては、「収入」と

「昇進」がとくに重視され、「自由」や「冒険」などのポヘミアンの価値感もっていないようである。

- (9) 貿易・商社員志望者においては、「収入」がとくに重視されている。

上述のように、職業的価値感の上からみても、また職業選択の過程からみても、両者の構造的関係は、きわめて密接なものがあると考えなければならない。

従来、職業選択に及ぼす要因として、前述のように適性（たとえば、手先の器用さ、言語能力、数的能力など）や人格特性（たとえば外向の性格とセールスマンなど）、あるいは興味（たとえば芸術型、書記型など）が、とくに強調されてきた<sup>(9)</sup>。これらの要因は、中学生低学年以下の段階においては、きわめて重要であり、またこれで十分であるかも知れないが、中学上級生以上の職業発達段階においては、選業選択は、たんに性能や個人的関心のみでなされるのではなく、個人の全人的な価値意識の根源にふれてなされるものとなる。すなわち、選択された職業により、その個人の価値・要求を満足させ、また社会からの期待に応ずるのである。この意味で中学上級生以上における進路指導は、この職業的価値感の構造に関する基礎的研究や考察なしには、成功しえないものと思われる。

### 職業的価値感研究と進路指導との 関連および今後の問題

本研究における対象は、中学3年生であるから、今後の生活過程において、新しい価値感や欲求が生まれ、その後さらに変動や葛藤が生ずることは、十分に予想される。また、志望している職業が一律に同じ性格のものでなく、企業体の規模や組織の中の地位などによって変わってくることも当然である。それ故、かれらの職業的価値感の発達・変化などに関する追跡研究が必要とされるわけで、本研究の本来の目標も、実はその点にあるのであるが、併せて現実の進路指導の場においても、かれらの職業選択の根底にある上述のような職業的価値体系への

洞察がきわめて重要な意義をもってくる。

中学生における職業指導に関する従来の研究は、主として適性・興味・人格特性の3方向からなされてきているが、本研究で明らかにされたような価値感、かれらに芽ばえ始めたばかりとはいえ、この方向からの究明も、けっしてゆるがせにできないと思われる。

従って、学校における進路指導も、その方法として、従来から職業適性検査や職業興味検査などがよく利用されているが、これだけに終始するのは、中学初年級までの段階である。D.E. Super らも述べている職業的発達段階における興味期（11～12才）、能力期（13～14才）の次に来る14才以上の開発期においては、職業に対する要求、興味、価値、機会などが全面的に考慮されるとしているのであるが、<sup>(10)</sup>この時期は、ちょうど中学上級から高校、大学にいたる職業的発達段階にあたるのである。青年期の重要な特徴として精神的世界、価値の発見ということが一般にいわれているが、この時期を体験しつつある生徒は、今後成長するに従って、きわめて複雑な価値体系をそなえていく。青年はその独創性を生かし、自己の適性を開発させたいと希望する反面、志望する一職業から得られる外的報酬、すなわち収入、地位や安定性に欠けている点も考慮しなければならない。それは、たんに自己実現への価値・要求のみでなく、他人への助力のような社会的価値の実現の場合などにもいえるであろう。

このような個人的、社会的価値体系の確立については、従来は、中学生の発達段階ではほとんど問題にされず、その進路指導においては、個人の職業的適性の分野をさぐり、その職業的興味の方向を明らかにすることによって、職業選択上の助言を行っていたのであるが、これでは十分ではなく、今後の進路指導は、前述のような価値感の葛藤を解決し、個人的にも、また社会的にも満足されうるような職業選択の決定行為にその核心がおかれるべきである。そして、一生徒によって選択された職業が、かれの個人的、社会的価値・要求をどのように満足させているかによって、卒業後の職業的適応がほ

とんどきまると考えられる。<sup>4)</sup> かくして、真の進路指導は、従来からある前述の他の方法と併せて、職業的価値感のダイナミックな構造を把握することなしには、とうてい行ないえないのである。

本研究で用いられた調査資料は、上述の意味において、進路指導計画や進路相談に関連して、生徒の職業志望や価値感に関する全体把握のみならず、進路指導の直接の資料として、個人の理解のためにも用いることができる。個人の職業的発達、職業選択をもって完了するのではなく、その生涯を通じて継続するのであるから、職業的価値感発達の研究については、心理学・教育学・社会学・経済学等の総合的見地からなされる、きわめて長期的な態度を必要とするが、そのような継続的調査研究、卒業者へのフォロー・アップにより、職業的成功と職業的価値感の発達との関連を追求しなければならない。その研究成果に基づいて、志望職業と価値感との間に矛盾が認められ、葛藤に悩んでいる現実の個々の生徒や学生に対しては、現在かれによって重視されている価値を満足させるような職業を選択するように指示したり、あるいは、かれの価値感と心理的に接近している価値を見出させ、それが満足されるような職業を示唆したりなどすれば、個人の志望職業と職業的価値感に関する調査研究そのものが、他の資料とともに進路指導に大いに役立ちうるであろう。本研究は、進路指導の上述のような新しい方法への試みとして提案する次第である。

## 要 約

個人の職業選択、職業的適応の重要な要因として職業的価値感を取り上げ、その実態を把握し、志望職業間にみられる価値感の差異を検討して、職業的価値感研究と進路指導との関連を解明した。方法として、M. Rosenberg の原案を改訂して、つぎの16項目からなる「職業的価値感調査票」を作成し、進路志望調査とともに実施した。①適性 ②収入 ③地位 ④社会的貢献 ⑤独創性 ⑥安定性 ⑦社会性 ⑧義務 ⑨自由 ⑩昇進 ⑪指導者 ⑫報恩 ⑬助力

⑭冒険 ⑮勉学 ⑯余暇。

その結果①、⑤、⑥、⑦、⑮などの価値は概して重視され、③、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑯などの価値は軽視ないし無視される傾向がある。これを男女別についてみると、男子では、⑥、⑧、⑩、⑪が、女子では、⑦、⑮が、それぞれとくに高く評価されている（各1～5%水準で有意）。

上記各価値間の相関を検討することにより、つぎの4つの価値群を抽出することができた。すなわち、職業的価値感、大別して、つぎの4群に分類できるのである。

a. 自己実現に位置づけられた価値群（自己実現性重視群） b. 社会に位置づけられた価値群（社会性重視群） c. 報酬に位置づけられた価値群（経済性重視群） d. 職業的義務感に位置づけられた価値群（義務感重視群）かくて、人が、上記4つのうちのいずれの価値を重視するかによって、その人の職業ひいては生活に対する態度も変わってくるであろう。

志望された職業のうち、18の典型的な職業を抽出し、それらの職業を志望するものの価値感に関して分析した結果、それぞれの、職業に対する価値のおきどころが明確に異なることが認められた。たとえば、芸術関係志望者は自己実現性を重視し、報酬を軽視し、また飲食・ホテル・観光業志望者は報酬を重視し、職業的義務感を軽視し、あるいは社会性を重視するものはサービス業の志望者に、自己実現性を軽視するものは公務員志望者に、それぞれ多く認められる。

今後は長期にわたる追従研究により、各個人の職業的価値感の発達と職業的適応、職業的満足感、あるいは職業的成功との関連を把握していきたい。かくして、個人の職業的価値感の研究は、現実の志望進路と価値感との間に矛盾が認められる生徒や学生に対する積極的指導などに、直接利用することができるであろう。

従来、個人の職業的適応や職業選択は、主として、興味、適性、人格特性などの要因によって理解され、従って、学校教育における進路指導の実践も、ほとんどそれらの要因を中心としてなされてきたのであるが、職業的価値感が成

立する中学上級以降では、本研究で論じたような価値感をも他の要因と同等に重視し、この要因を積極的に導入することによって充実した進路指導がなされる必要がある。

<付記> この研究について、近畿大学助教授 広井甫、大阪大学教養部講師中西信男の両先生から懇切なご指導を賜りました。ここに深甚の謝意を表します。

註

- (1) Thompson は、個人の適切な職業決定の要因として、興味、能力、人格特性、自己概念、価値体系、仕事に対する態度などを挙げている (Thompson, A. S. : A rationale for vocational guidance, *Person. Guid. J.*, 1954, 32, 533—535)。
- (2) Rosenberg, M. : *Occupations and Values*. The Free Press, 1957, 6. また Havighurst は、価値を「より望ましい、あるいはより望ましくない対象もしくは行動の型態」と考えている (Havighurst, R. J. : *Human Development and Education*. Longman & Green, 1953, 36.)。価値は、Rosenberg が説いているような肯定的な面だけに限定する必要はないのであって、一方の否定的な面についても考えることができる。
- (3) Ginzberg, E., et al. : *Occupational Choice*. Columbia Univ., 1951, 73—88.  
増田幸一：職業希望の個人的発達に関する研究、「職業科学」, 1960, 1, 3—14. 1961, 2, 3—17.
- (4) この点について、広井氏は、R. Hoppock や C. H. Lawshe の説を挙げて、「要求は、すべて意識されているものでもなく、K. R. Rogers や S. C. Pepper のいう人間の有機体の現実化、維持、強化といった進化につながる基本的な傾性 propensity から発生する全く基本的な有機的要求をも含めて考えなければならない」と述べている (広井甫：職業価値感の研究、「職業科学」, 1962, 3, 71.)。
- (5) 元来、人間の基本的要求の中で職業生活に直接関連するものは、①生物学的要求 ②保安への要求 ③尊重への要求 ④所属および愛情への要求 ⑤自己実現への要求であるが、職業生活において、①および②は、仕事に対する報酬、収入、生活保障により、③および④は、職業的集団に所属することにより、また職業によって規定される社会的地位により、⑤は職業を通して自己実現を果すことにより、それぞれ満足される (広井甫：「前掲書」, 76. Roe, A. :

*The Psychology of Occupations*. Wiley, 1956, 24—39.)。

- (6) Rosenberg, M. : *op. cit.*, 142.
- (7) 「その他」としての自由記述は 6.3% (26名) あり、分類後、残った主なものは、「親ゆずりのため何かと便利」などである。
- (8) 中学生を対象とした他の研究では、経済目的が人間完成目的に先行しており (伊藤惣右衛門：「職業指導の心理学」, 金沢書店, 1957, 307—331), 高校生を対象とした研究では、①自己実現 ②独立性 ③安定性 ④収入という順になっている (友金義治：高校生における職業的価値と希望職業との関係について、「職業指導」, 1961, 34, 493—495.)。
- (9) Rosenberg, M. : *op. cit.*, 12.
- (10) 武衛孝雄, 中西信男：Value に関する研究—大学生における職業的価値ならびにその職業決定との関係—日本教育心理学会編「教育心理学年報」1, 1962, 53, 99—100.
- (11) Super および Bachrach は、このことについて、男子はより career-oriented であり、女子はより person-oriented であるといっている (Super, D. E. & Bachrach, P. B. : *Scientific Careers and vocational Development*. Columbia Univ., 1957, 120.)。男女差がこのように認められることは注目し、進路指導理論の発展のために、今後、さらに究明する必要がある。
- (12) Rosenberg, M. : *op. cit.* 124—128.
- (13) J. O. Crites や J. P. O'Conner および J. F. Kinnane による因子分析的研究を総合した広井氏は、①安定、物質的、経済的 ②独立、成就、自由、創造 ③地位、社会的承認、名声、仲間の3共通因子に大別している。そして「1) 安定しているが依存的な生活と、安定よりも、自由な独立的な、創造的な生活のいずれを選ぶかということと、2) 高い社会的地位を望むか、それとも社会への奉仕を重視するか」の2組の価値感の組み合わせによる4つの価値感類型 value pattern が作れそうであると提案している (広井甫：「前掲書」, 77.)。
- (14) 近藤貞次：職業心理学、「教育学事典」3, 平凡社, 326—327.
- (15) 増田幸一：職業指導論, 金子書房 1952, 47—109.
- (16) Super, D. E. et al. : *Vocational Development, a framework for research*. Columbia Univ., 1957.
- (17) Brim, O. G. Jr. et al. : *Personality and Decision Processes*. Stanford Univ., 1962, 140—162. (昭和38年9月5日受付)